

平成 29 年 4 月 10 日

日頃より厚生労働行政の推進に当たり格別のご配慮をいただきまして、厚く御礼申し上げます。

さて、受動喫煙防止対策につきましては、4月7日に、WHO（世界保健機関）の事務局次長等の幹部が厚生労働大臣室にお見えになり、WHO事務局長からのレターをいただきました。その内容は、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会で、長い伝統である「たばこフリー」という政策を維持すること、特に屋内の公衆の集まる場（public places）での喫煙の完全禁止を全国レベルで実施することを要請するものです。

WHOからは、事務局長からのレターのほか、米国NIH（国立衛生研究所）の一部門であるNCI（国立がん研究所）とWHOが共同でまとめた「たばことたばこ対策の経済学に関する報告書」もいただきました。この報告書では、高所得国であっても、低・中所得国であっても、公衆の集まる場での喫煙を禁止する法律を導入したとしても、バーやレストラン等のサービス業部門にマイナスの影響を与えないことが示されています。

別添の資料のとおり、WHO事務局長からのレターと、上記報告書の概要を送付いたします。

受動喫煙防止対策の徹底にご理解賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

厚生労働省健康局

【連絡先】 (03-3595-2245)

厚生労働省健康局

健康課長 正林督章

WHO 事務局長（マーガレット・チャン）の書簡（仮訳）

2017年3月29日

拝啓

日本政府が公衆の集まる場（public places）での喫煙を禁止する新たな立法措置を検討している中、こうして手紙を書かせていただきました。2019年のラグビーワールドカップや、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、人々の健康を保護し、たばこの規制に関する世界保健機関枠組条約（WHO FCTC）を履行するため、日本が全国レベルでさらに一步を踏み出すことを応援しています。

2010年に世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局は、「タバコフリーのメガイベントのためのガイド」を公表しました。同じ年に、健康的な生活習慣、すべての人のためのスポーツを通じた身体活動、タバコフリーのオリンピックを推進していくことについて、WHOは国際オリンピック委員会（IOC）と合意しました。現在WHOとIOCはこの合意の更新にあたり、オリンピックが健康に資するレガシーをもたらすことを目指して、議論を続けています。

タバコフリーという方針は、1998年以降の各オリンピックで実施されてきました。現在では、呼吸器の健康を改善し心血管疾患を減らすという世界的な風潮を反映した方針となっています。2015年時点で、公衆の集まる場（public places）の喫煙を禁止している（屋内の指定喫煙場所がない）のは、レストランについては63か国、パブ・バーについては63か国、職場については64か国と、広がっています。

こういった対策は、FCTC第8条の実施につながるものです。日本を含む締約国は、「屋内の職場、公共の輸送機関、屋内の公衆の集まる場（public places）及び適当な場合には他の公衆の集まる場（public places）におけるたばこの煙にさらされることからの保護を定める効果的な立法上、執行上、行政上又は他の措置」の実施を義務づけられています。第8条の実施のため

のガイドラインは、日本を含む締約国により、2008年に採択されました。ガイドラインでは、第8条が示す義務について、「すべての屋内の公衆の集まる場（public places）、すべての屋内の職場、すべての公共輸送機関、場合によってはその他の（屋内または半屋内の）公衆の集まる場（public places）が二次喫煙の煙にさらされないようにすることによって万人に普遍的な保護を与える義務」とされています。

また、高所得国であっても低・中所得国であっても、たばこフリーという政策は、レストランやバーなどにマイナスの影響はないとされていることについても留意が必要です。実際、たばこフリーという政策は、経営にプラスの影響をもたらすこともあります。WHOとアメリカの国立がん研究所が出した、最新の「たばことたばこ対策の経済学に関する報告書」でも詳細が記述されていますが、（公衆の集まる場（public places）での）喫煙を禁止する法律は、売り上げ、雇用、店舗数に、平均的にはマイナスの影響を与えないとされています。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会で、長い伝統であるたばこフリーという政策を維持するよう、要請します。特に、屋内の公衆の集まる場（public places）での喫煙の完全禁止を全国レベルで実施するよう要請します。

熟慮に熟慮を重ねたことを、どうか受け止めてください。

敬具

事務局長 マーガレット・チャン

（※下線は厚生労働省による）



World Health Organization

20, AVENUE APPIA – CH-1211 GENEVA 27 – SWITZERLAND – TEL CENTRAL +41 22 791 2111 – FAX CENTRAL +41 22 791 3111 – WWW.WHO.INT

Tel. direct: +41 22 791 4253
Fax direct: +41 22 791 4832
E-mail :

In reply please
refer to:

Your reference:

The Minister of Health, Labour and Welfare
Ministry of Health, Labour and Welfare
Japanese Government
1-2-2, Kasumigaseki
Chiyoda-ku
Tokyo 100-8916
Japan

29 March 2017

Dear Sir,

I have the honour to write to you as the Japanese Government is considering new legislation to introduce smoke free areas in public places. In this context, I am writing to encourage Japan to take further steps at the national level to protect public health and strengthen implementation of the World Health Organization Framework Convention on Tobacco Control (WHO FCTC) in advance of the 2019 Rugby World Cup and the Tokyo 2020 Olympics.

In 2010, the WHO Regional Office for the Western-Pacific published 'A Guide to Tobacco-Free Mega Events'. That same year, WHO signed a Memorandum of Understanding with the International Olympic Committee in order to promote healthy lifestyles, physical activity through sport for all and tobacco free Olympic Games. The two organizations are currently discussing renewal of this agreement, with a view to ensuring that the Olympics support a positive health legacy.

In this respect, tobacco free policies have been implemented at each Olympic Games since 1998. Today, these policies reflect the global trend to adopt measures to improve respiratory health and reduce cardiovascular disease. As of 2015, complete bans on smoking in public places were widespread, including complete bans (with no designated indoor smoking areas) in restaurants (63 countries), pubs and bars (63 countries) and workplaces (64) countries.

These and other measures implement Article 8 of the WHO FCTC, which oblige Parties, including Japan, to implement "effective legislative, executive, administrative and/or other measures, providing for protection from exposure to tobacco smoke in indoor workplaces, public transport, indoor public places and, as appropriate, other public places." Guidelines for the Implementation of Article 8 were adopted by Parties to the Convention, including Japan, in 2008. The Guidelines state that the obligation in Article 8 is an "obligation to provide universal protection by ensuring that all indoor public places, all indoor workplaces, all public transport and possibly other (outdoor or quasi-outdoor) public places are free from exposure to second-hand tobacco smoke."

cc: The Minister of Foreign Affairs, Ministry of Foreign Affairs, Tokyo
The Permanent Representative of Japan to the United Nations Office and other
International Organizations at Geneva

bcc: WPRO

منظمة الصحة العالمية • 世界卫生组织

Organisation mondiale de la Santé • Всемирная организация здравоохранения • Organización Mundial de la Salud

It is also important to note that evidence from high-income countries, as well as low- and middle-income countries, has shown that smoke-free policies do not adversely affect the hospitality sector, such as restaurants and bars. In fact, smoke-free policies often have a positive impact on businesses. As is detailed in the recent WHO/United States National Cancer Institute monograph on The Economics of Tobacco and Tobacco Control, the evidence from other jurisdictions is that smoke-free laws do not on average adversely affect sales, employment or the number of establishments in business.

I urge you to ensure that the 2020 Tokyo Olympics maintain the longstanding tradition of adopting tobacco free policies and, specifically, I urge Japan to adopt a complete ban on smoking in indoor public places at the national level.

Please accept Sir, the assurance of my highest consideration.

Yours faithfully,



Dr Margaret Chan
Director-General

WHOと米国がん研究所による

「たばこが世界経済に与える影響に関する報告書」について

- 平成29年1月10日、WHO(世界保健機関)は、米国NIH(国立衛生研究所)の一部門であるNCI(米国がん研究所)と共同でまとめた「たばこはたばこ対策の経済」と題した報告書を公開。

【主要な結論】

- たばこ税やたばこ価格の上昇を含む政策は、たばこの使用を大幅に減少させ、がんや心疾患から人々の健康を保護し、政府に収入をもたらすことが示されている。一方で、たばこ対策がなされないままだと、世界経済全体で年間1兆ドル(約116兆円)以上の医療費などの損失を生じさせる。
- たばこ製品の需要を減らし、コストを減少させる政策には、たばこ税や価格の引き上げ、たばこ産業の広告活動の禁止、写真による警告表示、禁煙支援プログラムなどがあるが、各国政府とも、たばこ税による税収(世界全体で年間2690億ドル)に比して、非常に少ない額(世界全体で10億ドル未満)しか、たばこ対策に使っていない。
- たばこ対策により経済は悪化しない。高所得国と低・中所得国からのエビデンスによれば、受動喫煙防止政策によりバーやレストランなどサービス業部門に負の影響は与えないことが示されている。一方、たばこの使用は貧困にもつながっており、たばこ対策は、健康格差を小さくすることもつながる。